

は、如何にも教養ある近代的基督教徒の誠見と抱負とを示して居る。其根本信条たるべき神を主觀的理想其物として見る内在的沈神論が、果して何處まで著者を基督教徒として保ち得るかは疑問であるが、唯基督教の一般的精神を立點として、進んで近代的思潮と現實的生活の中に奮闘せんとする人に取つては、かゝる觀念上の問題の如きはさまで重大なを意義を有しないかも知れない。現に著者は舊宗教の功利的他力主義を排し、奇蹟的救済を本とする基督教信仰を攻撃して、名目上のクリスチアンたらんよりは敬虔なる無宗教者たれと主張して居る。然も著者は決して素人としての基督教信者ではないので、其神觀や基督論の發展を叙し天啓や神學の權威を批評した所に、其歴史上教義上の専門的造詣の淺からぬことが現はれ、特に基督教若くは一般に宗教をば單なる哲學や人生觀と考へたり、又之を唯の道德や社會的事業と同一視する謬見を排斥して、宗教を以て愛による見神の經驗、即ち宇宙との人格的靈交に在りと主張する所に、其宗教に對する徹底した洞察と理解とが示されて居る。唯著者の所謂宗教的態度である奮闘的生活と宇宙の神聖化即ち普遍の愛とが思想上如何に調和せらるべきか、又其向上の模範たる人としての基督の歴史的確實が、救済者としての神治の基督を否定した後に果して何の點まで保持し得られるか、又因はれたる忠君愛國や神社崇拜を痛快に排斥した其世界主義が、現在一般の民族主義と如何なる關係に立つべきか此等の問題は研究思索よりも實修實踐を主とする著者には余り多く考量に値しないかも知れないが、然し少くとも實行の前提として尙大いに反省すべき疑問たるを免れないであらう。然し固より

本書は宗教の理論的組織でもなければ、社會問題人生問題の學問的研究でもなく、唯著者の精練された基督的精神から見た人生の批評であり、又其信仰の告白であつて、蓋し眞面目な修養の資料として新しい内容のあるものと云はなければならぬ。麴町區平河町五、洛陽堂發行。定價金一圓三十錢。(宇野圓空)

### 忠義の哲學

ジョサイア・ロイス原著  
鈴木半三郎譯

「忠義の哲學」は個人主義の最も盛なる米國民の間に、身を捧げて公に奉ずる忠義の眞精神を扶植せんが爲めに原著者によつて、ハーバード、ボストン、エール等に於いて數次講演せられたるもので、その要綱を一九〇八年に上梓せられたのが原著である。

ロイスは同じハーバード大學にゼームスと共に職を奉じ相互に研鑽辨論せしがゼームス氏先づ物故して、後數年亞米利加哲學協會より六十歳の祝賀會を受けて氏又その後を追ふた。譯者は序によれば彼の地に在つて著者に親しく接せられた方で、ゼームスのみ我國に喧傳せられて論戰の當の相手たるロイスが餘り紹介せられてゐないのを嘆き、又本書は我國民族の根本精神と直接の交渉があるを以つて、氏の滿六十歳の記念祝賀哲學大會のあつたことを機會として譯出せられたのであつて、譯者なり發行期なりに當を得たものと言へる。

「譯文はいたく未成品」と初めに辭つては居られるが、今少し丁寧に譯して貰ひたかつた。硬い逐語譯も善くないが、「譯」である以上には餘りに碎け過ぎて、「譯」と言ふよりは忠實なる梗概と言

ふ風になつて仕舞つても困る。乍然譯者に深い理解のあることは疑もないことである。理解なくては斯くまで要點を摘出して行くことは出来ない。梗概紹介を以つて目的とせられてゐるならば上乘の出来榮えと稱せられるであらう。明快にして滯滞なき原文を讀む様な氣分をもつて譯文にも接せられるからである。各章下節の題は原著には無いのを大意を捕捉して新たに添附せられたことは讀者にとつて幸はせなことである。卷末に原著のと較べては簡ではあるが索引と、又別にロイス小傳及主要なる著作目録とがある。全卷に亘つて餘り少くはない誤字は再版には除かれることと思ふ。計吾に接して記憶を新たにせらるゝ際、本書の出たことを喜ばないわけにゆかぬ。(尾生光三郎)(四六判三二七頁並附録、麴町平河町五洛陽堂、發行定價壹圓參拾錢)

### 金剛心

文學博士 富士川 游著  
醫學博士

近年特に親鸞聖人の教に隨喜する博士の各所の講演を輯録したのが此小冊子である。眞宗の信仰に入る筋道と其味ひ方の大要を平易に組織立て、百頁足らずの間に叙してある。僧侶でも宗學者でもないと斷はられた博士にしては、其内容に於て教義上の欠點もなく、如來廻向の三心を説く邊りは眞宗に對する理解の淺からぬことを示して居る。唯然し阿彌陀佛を文字通りの久遠の親と見たり、又我身が父母細胞の遺傳であるの故を以て、直に業種因縁の繁縛を脱し得ないものとする如きは、常に博士の思想の根底をなして居るヘツケル流の物質的一元論に基くものらしく、そこから如何にして正當な意味の罪惡觀が出るか、又それが如何にして往

生思想と調和し得るか危まれる。殊に宗教の要は唯感情や意思の安定を得る爲めに神佛の教として外から命ぜられたものに從ふに在るといふのは、眞宗の教旨としては勿論、所謂人格の統一の爲めにも果して幾何の價値があるうか。之を以て直ちに金剛心なりとするが如きは大に其當を失して居る。要するに全體として信仰の動機、旨趣が根本的に明瞭でないのは博士に對する吾人の期待に背くこと甚しい。之を以て在來の信者への誠めとするならばとにかく、博士の希望の如く智識階級に對する勸化としては全く無意味である。附録の眞宗綱領の文類は初心の人へのカテキズムとして便利であらう。(宇野圓空) 麴町區平河町五、洛陽堂發行 定價金五十錢。

### 言語及讀方の基本的研究

文學博士 小西重 直校閱  
文學士 田中廣 吉著

著者は已に『小學校に於ける實際的教授法』、『實際的教授訓練の基礎』及『信仰を基とせる道德的陶冶の研究』等を出されてあつて、教育教授法に造詣の深い事は教育界に廣く知らるゝ所である。元來著者は此の『言語及讀方の基本的研究』の序文に云つて居るゝ通り、教授法の研究に於て從來一般に「習慣的方法の整理に始まつて自己の獨斷に終」つて居る様な態度を脱し、「客觀的に具體的事實に就て實驗又は統計をなし其の結果を歸納」して其處に教授法の原理を建設する事に膺心して居られるのだが、先づ讀方教授法の基礎として、各種の方面より斯かる客觀的研究を試みら